

<p>団体名</p>	<p>ENJOY CAP</p>	<p>活動タイトル</p>	<p>CAPと中学校、初めての協働。全校生徒を「いじめの被害者・加害者・傍観者にしない！」対等な関係へGO!!</p>	
<p>望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）</p>			<p>■活動風景</p>	
<p>●望ましい社会状況（ビジョン）</p>	<p>「全ての子どもが安心して、自信を持ち、自分で選択しながら自由に生きられる社会」これが当団体のビジョンである。そのためには、子どもが人権意識を持ち、暴力を予防するスキルを正しく身につけること。また子どもの自己肯定感を高め、SOSの発信を受け止められる大人が子どもの周りにたくさん存在することである。子どもの人権が生活の中で保証され、ひいてはそれが「暴力のない、そして暴力を許さない社会」をつくることになる。「誰もが安心して、自信を持って、自由に生きる」そんな社会をめざしたい。</p>		<p>CAP中学生プログラムを受けている学生の様子</p>	
<p>●団体の社会的役割（ミッション）</p>	<p>当団体のミッションは、社会で起きているさまざまな子どもや大人の人権を侵害した事件を、CAPプログラムの実施・浸透を通じて未然に防ぐことである。そのための具体的な取組として次のようなことを推進する。 ①子どもも大人も人権を自分ごととして捉え、人権意識（＝大切な自分）を高める。 ②暴力の予防のスキルを伝え、使えるようにする。（NO,GO,TELL友だちの助け合い、護身術） ③子どもの気持ちと、またSOSをしっかり受け止められ、エンパワメントな関わりができる大人を増やす。 以上のことを継続的に子ども、先生、保護者と地域のおとなに届けていき、「不安」を「勇気」に変換していくことである。</p>			
<p>●団体の活動基盤</p>	<p>●人材の確保と育成：活動基盤の強化として、CAPの活動に興味・関心のある人を発掘し（すでに1人確保）、養成講座に送り出し、スペシャリストとしてワークショップに参加し活動を支えてもらう。また現メンバーにはさらなる資格取得をし、幼稚園や中学校のワークに参加できる様に育成する。 ●活動資金：「CAPすごろく」の販売。「おとなCAP」を企業の「人権研修」「セクハラ・パワハラ防止研修」として実施する。 ●ナレッジ：学校との協働事業の経験を活かし、他校、教育委員会へ情報を発信し、ワークにつなげる。また、CAPの他の団体とノウハウを共有し、さらに日本にCAPを普及させる。</p>			
<p>■活動報告</p>			<p>■1年間の目標に対する達成状況(まとめ)</p>	
<p>●中学生暴力防止プログラムの実施：千葉市内の中学校1～3年生各1クラス及び新1年生1クラス合計116名が参加。日程調整や進め方など、学校長との打合せを随時、担任との事前打ち合わせを実施。生徒たちに事前と直後にアンケートを実施し、担任には直後と3か月後のアンケートへの協力を依頼した。生徒たちの変化などを注視していただくとともに、生徒たちには相談先を紹介したカードと学年に合った復習教材を配布した。 ●CAP保護者ワークショップ3回実施（内訳：中学校の保護者対象2回、同学区の小学校の保護者対象1回）：地域の方々にも呼び掛け、内容を工夫したチラシを段階を踏んで配布、「すぐーる」(学校-家庭-地域をつなぐ連絡システム)を活用してできる限り周知を徹底した。次年度以降の継続に向けて中学校と関わり深い支援団体に保護者ワークショップへの参加を依頼し理解を求めた。 ●CAP教職員ワークショップ3回実施：中学校2回、小学校1回。保護者、教職員ともにアンケートを実施。 ●回収したアンケートに基づき報告書を作成。中学校長にもコメントを依頼。●CAPスタッフ育成のための研修を2回、トレーニングを5回実施。</p>			<p>●「中学生暴力防止プログラム」で「人権」を正しく学んだことで生徒たちの自己肯定感が高まった。様々な暴力の問題を班の仲間とともに意見交換をしながら自分事として捉えられたことで、視野が広がりできることを選択肢が増えた。具体的には、いじめられた時の対応として「逃げる」がワークショップ後は2倍以上に、「やめて、と言う」が1.7倍、「相談」が1.4倍に増加した。また、いじめを見たときの対応についても、友達のために行動する選択肢が軒並み増加した。CAP受講前は「辛い気持ちを我慢する」割合が半数近くに上っていたが、受講後は「相談する」7割近くとなった。相談先も多岐に渡ることが認識され、自分への自信と他者への信頼回復の一助になったことがうかがえる。 ●保護者ワークショップでは保護者だけでなく地域の方々からの参加があったため、CAPの理念を共通理解し傾聴のスキルを学ぶことで子どもを支える基盤の強化につながった。 ●教職員ワークショップでも、「子どもの人権」への意識の向上、傾聴の重要性を再認識し、児童生徒及び同僚に対するエンパワメントな関わり方を具体的に考え合うことで、今後の学校・クラス運営への活用が期待できる。小中学校とも100%の先生がCAPは子どもの役に立つと回答した。</p>	
<p>■事業を通じて得られたノウハウ</p>			<p>■望ましい社会状況を達成するための課題</p>	
<p>●子どもワークショップ「事前アンケート」と「直後アンケート」の比較により、以下の点について気づきが得られた。 ①自分がいじめられた場合、それに対処する選択肢の割合が増えたことにより、被害をそのまま放置することが少なくなり、結果、被害者が減ることが予想される。 ②他者がいじめられていることを見た場合、いじめを止めさせるため何らかの行動を起こす割合が高くなっている。そこから「何もしない傍観者」から「いじめを止めさせる積極的な傍観者」が増えることが予想できる。このことからCAPが全ての各学校にある「学校いじめ防止基本方針」に取り入れられるように提案できるのではないだろうか。 ③「自分は大切にされてない」と、思う生徒が数名明らかになった。人権をないがしろにされている怖れのある生徒である。今後とも気に掛け慎重に見守っていくことを学校と共有できた。 ●学校との「協働」により、次年度の予算確保に向けた打開策が生まれると同時に、他市でも展開できそうなネットワークの構築にも繋げるヒントをもらえた。</p>			<p>●保護者の参加者を増やすための、さらなる工夫の必要性。日程調整、学校長による学校だよりへの掲載等々、できる限りの工夫は取り組んできた。ただ若い保護者に対しては、SNSの活用など、CAPの必要性を感じられるアプローチの仕方と、それを周知させる方法の検討がさらに必要である。 ●教職員の多忙さは社会問題となっている。ただ学校だけが子どもを支える役割を担うものではない。CAPとしては、「人権教育」の場を通じ、その一部を担うことで、子どもたち、教職員、保護者、子どもに関わる地域の方々に働きかけ、学校現場の負担を少しでも軽減したい。「子ども」を真ん中に据えて互いが協働しあえるように、CAPの活用を積極的に提案する。 ●体罰容認の問題については、保護者や地域で子どもに関わる活動をしている方の中でも、「体罰」を容認し正当化する価値観が根強く残っている。このような価値観や意識を変えることは容易ではないが、「体罰＝暴力」との認識を、CAPおとなワークショップを通じて粘り強く伝えていく必要がある。</p>	
			<p>■活動成果のアピールポイント（自由記入）</p>	
			<p>この1年間の活動を通じて</p>	<p>いじめにあったときの対処法「NO、GO、TELL」が約2倍に、傍観者の立場をとりなくなった割合1.5倍に共にUP！「いじめの被害者・加害者・傍観者にしない」目標をクリア！</p>
			<p>■受益者の具体的な変化（自由記入）</p>	
			<p>CAPを受ける前は「自分には生きる価値がない」と感じていた生徒が、受講後、「生きてもよいのではないか」という考えに変わった、というアンケートが寄せられた。この一言に尽きる。最も大きな変化である。</p>	